広島大学　大学教育研究センター　大学論集
第22集（1992年度）1993年３月発行：145－161

高等教育史研究の回顧と展望

伊　藤　彰　浩

目　次

Ⅰ．はじめに
Ⅱ．回顧
　１．1960年代初頭まで－前史的時代－
　２．1960年代半ばから70年代まで－本格的な研究のはじまり－
　３．1980年代－専門化の進展－
　４．1980年代末から90年代－再びの隆盛？－
Ⅲ．　評価と展望
　１．評価
　２．展望

高等教育史研究の回顧と展望

伊　藤　彰　浩*

Ⅰ．はじめに

歴史研究は，比較研究とならんで，わが国の高等教育研究においてきわめて重要な位置づけを与えられてきた。本稿では，そうした歴史的アプローチによる研究の動向を整理するが，筆者の能力と紙数の関係から，以下のような，大幅な対象の限定をせざるを得ない[1]。

まず第一に，ここでみていくのは原則として，日本の明治以降の時期を対象とした高等教育史研究である。周知のように，高等教育史研究は，外国研究と日本研究とのインタープレイによって豊かな成果が生み出されてきた，まれなる研究領域のひとつである。特に，「比較」と「歴史」との２つのアプローチが融合された比較史的研究が，わが国の高等教育研究全体のなかで非常に重要な位置づけを与えられてきたことは，あらためていうまでもない。しかし，ここで歴史的アプローチにたったすべての外国研究や比較研究にふれることはとてもできないし，比較史的研究に関しては別のレヴュー論文であつかわれる予定でもあるので，以下では，近代日本高等教育史を扱った研究のみを取り扱うことにしたい。

第二に，高等教育史には教育史，教育社会学，科学史，法制史など多様な専門分野からのアプローチが存在し，そうした学際性がこの領域の研究の発展に大きく寄与してきたのであるが，ここで各専門分野のそれぞれの動向に漏れなく平等に目を配ることはできない。各分野には，おのおの固有の研究の流れがある。以下ではなるべくそうした流れを縦断した，全体としての高等教育史研究の傾向を描き出すことをめざしたいが，執筆者にとって比較的事情のわかる教育社会学や教育史－特に前者－における研究動向に，言及が偏りがちになることは避けられないだろう。

第三に，各高等教育機関の個別沿革史の動向には，必要な限りで部分的にふれるのみとする。むろん，個別沿革史の編纂が，高等教育史研究一般に対してもつ重要性の大きさはあらためていうまでもないし，特に近年，充実した沿革史が数多く登場しつつあるなかで，それらに関するレヴューの必要性が増していることも否定できない。けれども，数百冊にのぼる各校の沿革史の全体を対象とすることは，執筆者の能力をはるかに超えることであるし，紙数の面でも，沿革史のレヴューだけで十分に独立した論考をなりたたせるだけの分量を要しよう。したがって，それらの動向については，すでに出されているいくつかのレヴューに譲るとともに[2]，他日の課題としたい。

第四に，あつかう文献の範囲は，著書を中心とし，論文レベルのものはあくまで必要な限りでふれる。ただし，著書の場合も決して網羅的な言及がなされているわけではない。とりあげる文献はあくまで筆者の恣意的な選択の結果である。

最後に，ここで対象とする「高等教育」の範囲は，大学，旧制高等学校，旧制専門学校（実業専

＊広島大学　大学教育研究センター助手

門学校を含む)，高等師範学校が中心である。軍関係学校や師範学校（1943年以降の）などその他の中等後教育機関に関する研究は原則として扱わない。むろん，それらを軽視するわけではなく，これもあくまで筆者の能力と紙幅による限定の結果である。

II．回顧

以下では高等教育史研究の展開を4つの時期にわけて「回顧」を試みる。すなわち，第一に，1960年代初頭までの高等教育史研究の前史的時期，第二に，研究が本格的に開始され，それが大きな盛り上がりをみせた1960年代半ばから70年代までの時期，第三に，前の時期ほどの派手さはなかったものの，研究の専門化が進展し，かつそのさらなる広がりがみられた70年代末から80年代にかけての時期，そして最後に，新たな研究の盛り上がりの傾向がみられるかに思われる80年代末から現在に至るまでの時期である。

1．1960年代初頭まで　－前史的時代－

この時期には概して高等教育史研究は不振－あるいは不在－であった。研究はきわめて散発的にしか存在せず，そして，そもそも日本高等教育史を自覚的に専攻する研究者はほぼ皆無の状態であった。大学の自治問題などに関しての，若干の歴史的分析がこの時期にないわけではないが，ほとんど場合，それらは啓蒙的ないしは時論的歴史論の域をでなかった。当時の状況は，ある研究者が回顧しているように，「そんなテーマでは将来の就職の機会はおろか原稿を頼まれるチャンスもない時代」(寺崎，1989，p.67）だったのであり，高等教育史への関心はきわめて低かったのである。

そうした中でも重要な研究が存在しなかったわけではない。たとえば，大久保（1943）は，「日本の大学は上代以来一千有余年の歴史と伝統を持つてゐる」(p.388）として，上代の大学寮から大正期の大学令までを一貫してあつかった通史的研究である。近世以前と近代以後の「大学」を連続して捉えていることなど問題点を数多くもつとはいえ，いまや，この書物は大学制度史の古典的著作となっている。また，唐澤（1955）は，回顧録や自伝等の資料を多用して近代日本の「学生像の変遷」をとらえようとしたものであり，著者自身が「従来の制度史の立場からの教育史研究を超えた，新しい教育史研究への一つの試み」(p．3）と性格づけているように，社会史的研究の先駆的業績であった。

しかし，当時においてこれらのユニークな業績に続く研究は現われなかった。また，これらの業績を生み出した研究者たちにとっても，高等教育史研究は，彼らの仕事の一部分をなすに過ぎず，彼らには決してこの研究領域の専門家としての自覚はなかった。しかも，それらの研究者相互の間にはほとんど交流がなく，彼らの研究は，まったく文字どおり，孤立的，散発的に生み出されていたのである。

2．1960年代半ばから70年代まで　－本格的な研究の始まり－

こうした状況に変化が生じたのが1960年代半ばから70年代にかけてである。この時期に，初めて

わが国における本格的な高等教育史研究が始まった。その契機になったのが大学紛争と，それに伴う高等教育改革ブームであったことはいうまでもない。高等教育研究の全体についても同様にいえることであるが，この1970年前後の時期が，歴史研究にとっても実質的なスタートの時点となったのである。

興味深いことは，この時期の多くの高等教育研究者の間に，教育史，科学史，法制史などの歴史研究に対する強い関心が存在していたことである。その理由について天野（1989b，p.26）は「この1970年前後の時期が，エリートからマスへの段階移行の最後の局面，さらにいえばエリート大学の危機の時代であった」からであり，さらに「『大学』，より正確には『エリート大学』とはなにかが，あらためて問わねばならない状況が，そこには存在した」からであったと指摘している。最終局面に近づいていた高等教育大衆化の過程を，大学紛争という「危機」を契機に，改めて振り返ろうとする機運が生じていた，というのである。

そうした1970年前後の雰囲気のなかで高まっていた高等教育史への関心に応える格好の機会を提供したのが大学史研究会であった。1960年代なかばに発足したこの研究会の最大の功績は，おそらく，高等教育史を志す研究者のネットワークを形成したことであり，この領域が一つの研究分野として認知されることに重要な貢献をした点であろう。しかも，その研究者集団は，多様な専門的背景をもった人々によって構成された，学際性の高い集団であった。その初期の「世話人」の顔ぶれ－寺崎昌男，中山茂，皆川卓三，横尾壮英の諸氏－からもうかがえるように，この研究会は，まず科学史家と教育史家の出会いの場となったのであり，さらに後には教育社会学や法制史などの研究者が加わり，きわめて学際的な研究者集団へと発展していったのである。教育史家は，初等・中等教育の後に続く教育段階としての「高等教育」を対象とし，その「制度としてのフォーマルな面だけにこだわりがち」な傾向をもっていたのに対して，科学史家は，「科学研究の場」として大学をとらえ，「[制度の] 底にある学問論的背景と歴史のダイナミズムの把握」をめざそうとする（中山，1971，pp.202－204）。さらに，教育社会学者は，経済発展あるいは社会移動といったマクロな社会変動と高等教育の関係に関心をもち，加えて，構造機能論などの理論的フレームワークを歴史研究に紹介していく。こうした異分野間の活発な交流によって，高等教育史研究の視野は，一つの専門分野に限られない，大きな広がりをもちえていったのである。

さらに，この研究会は研究成果の発表の媒体も提供した。1969年に，当初は研究会のニューズ・レター的な性格をもったものとして創刊された『大学史研究通信』は，次第に研究論文を掲載するようになり，研究雑誌的な性格を強めていく。また，この研究会は，高等教育史研究を志向する若手の研究者たちを育てる場ともなった。それにより，研究会の創設者世代に加えて，より若い世代が育成され，高等教育史研究者の層の厚みが増すことになった。このように，大学史研究会は，1970年前後に存在した，高等教育史研究のエネルギーを集約しつつ，それを高揚，維持させる，中心的な舞台となった。次にみるように，この時期に生み出された業績のほとんどは，この研究会に何らかのかたちで関係していた人々によるものであり，当時の高等教育史研究は，この研究会を中心に展開していったといっても決して過言ではない。。

こうして，大学史研究会をその中核としつつ，この時期の高等教育史研究は大きく盛り上がりを

みせ，多数の研究が生み出されることになった。その主要なものを著書のみに限ってあげてみても，たとえば科学史分野では，広重（1973）は，通史的にわが国の科学研究体制の移り変わりを追っていくなかで，研究機関としての高等教育の社会的位置づけの変化を鮮やかに描き出し，帝国大学の誕生に関して中山（1978）は，国際比較的な観点から，わが国における近代大学の生成の意味を考察している。教育史家によるものでは，海後・寺崎（1969）は，戦後改革の過程とその後の展開を高等教育制度にかかわって実証的に明らかにし，また寺崎編（1970）は，戦後の様々な大学論を集成した資料集であり，戦後の高等教育の展開についての有用な見取図を与えてくれるものである。さらに，筧田（1975）は，高等中学校制度の創設から大正期前半までの旧制高等学校の制度や教育，学生生活を考察しているし，田中（1978）は，「大正デモクラシー」期の大学拡張運動の様相を明らかにしている。また，寺崎（1979）は，明治20年代の帝国大学における自治的慣行の成立過程に関する精緻な分析をおこなっており，三好（1979）は，幕末から明治初年にかけての工業教育の成立過程を明らかにしている。加えて，国際交流史として留学生の歴史的分析をおこなったものとして石附（1972）や渡辺（1977－78）があげられる。

教育社会学分野では，深谷（1969）は，江戸時代末期から明治末期までにおいての学歴主義の成立と発展の過程を描くなかで，高等教育がそこで果たした役割について描いている。また，麻生（1970，1978）は，近代日本のエリート形成と教育との関係について，さらには大学がもった人材養成機能の歴史的変化について分析している。潮木（1973）は，先進諸国の高等教育の量的拡大過程の比較分析をおこない，わが国の高等教育発展の国際的な位置づけを試みている。天野（1977）は，明治期中期までの帝国大学教授のキャリア・パターンを講座制成立との関連で考察したアカデミック・プロフェッション研究である。また，同じく天野（1978）は，専門学校制度の歴史を描き，それが「大学」とは異なり，社会の需要の変化にきわめて敏感に応えた，ユニークな構造と機能をもっていたことを明らかにしている。

その他にも，翻訳ではあるがスミス（1972）は，大正期末から昭和初年にかけての学生運動の動向を，東大新人会に焦点を置いて分析している。さらに，尾崎（1967）や坂本（1977）は，高等教育卒業者の就職問題の社会史ともいうべきものであるし，佐藤（1964）は，大学財政政策の展開を追っている。また，Spaulding（1967）は，いまだ翻訳はされていないが，高等文官試験の歴史を分析した，ユニークな高等教育史としての一面をもったものである。加えて，旧制高等学校について研究紀要（『旧制高等学校史研究』（1974－79））が発行されていたことにもふれておきたい。

なお，この時期について重要なのは通史的研究書の刊行である。特に本格的な高等教育史の通史を含んだ，『日本近代教育百年史』（1974年）の出版は，特筆すべき出来事であった。高等教育史研究がわが国で本格化してから，かなり早い時期にこのような充実した通史が完成したことは，当時の高等教育史研究のエネルギーの大きさをうかがわせるものである。しかもそれが教育史家と教育社会学者との学際的共業の産物としてうみだされたこと，また，それが，「概説，大学予備教育，大学，専門学校」という章構成からもうかがえるように，帝国大学中心史観からの脱皮を示し，高等学校や専門学校などの非大学高等教育機関にも周到に目を配ったものであったことは，その顕著な特徴であった。その他にも，すでに60年代に日本科学史学会（1964－72）が，資料集の形で斬新

な高等教育史の概観を提示しているし，また寺崎・成田編（1979）は，外国高等教育史も含んだ，手ごろな通史的著作である。

以上のような，60年代から70年代にかけての時期に登場した諸研究をみると，そこにいくつかの傾向や特徴を指摘することができるだろう。そのひとつは，それらの研究の多くが，「大学」史－特に「帝国大学」史－ではなく，非大学機関をも含んだより幅広い「高等教育」史研究をめざしていたことである。このことに特に貢献したのは天野郁夫の一連の業績であった。天野（1974，1978）は，戦前期のわが国の高等教育が，大学と専門学校との二つの層と，官立と私立との二つのセクターをもった，多元多層的で，ハイアラーキカルな構造をその特徴としてもち，かつそれぞれのタイプの高等教育機関が，独自の社会的機能を果たしていたことを描き出している。そして，先述のように，特に専門学校がもつ社会的ニーズへの「感応性」の高さが，わが国の高等教育構造の形成にきわめて重要な意味をもったことを明らかにした。

第二に，この時期の多くの研究が，外国研究から大きな刺激を受けていたことであり，さらには，国際比較的な視野からわが国の高等教育史を分析しようとする志向が強くみられたことである。特にこの傾向が顕著なのは，教育社会学者や科学史家であり，さきにあげた潮木（1973）や中山（1978）などはその代表例であった。ここで指摘しておくべきことは，このような志向に影響を与えた幾人かの外国人研究者の存在であり，かれらは比較研究のための視点と枠組みを提供することにおいて，強いインパクトをわが国の研究者におよぼした。その最も主要な人物を二人挙げておけば，科学社会学的な観点から卓抜した高等教育システムの比較研究をおこなうとともに，階層構造，職業構造，教育構造の歴史的関連のあり方により高等教育システムの発展が規定されると主張したベン-デービッド（1964，1969，1971）と，「構造＝歴史『理論』」により，「エリート」・「マス」・「ユニバーサル・アクセス」という３つの発展段階を描き出し，量的拡大がさまざまな側面での高等教育の質的な変化を伴うことの見事な理論枠組みを提出したマーチン・トロウ（1976）であろう。

第三に，これまでにも指摘したようなアプローチの学際性である。特に伝統型の歴史研究スタイルに対する，教育社会学的アプローチの影響は大きかったように思われる。教育社会学者による歴史研究の特徴を挙げてみれば，個別性よりも普遍的傾向性への注目，法令・政策・制度的ディテールよりも構造・機能・文化・社会集団の重視などといった点を指摘することができる。このように，異なった研究アプローチが存在し，互いに影響し合ったことにより，研究対象と方法において，高等教育史研究者の視野は大きく拡大されていった。そして上記のような，大学以外の高等教育機関へ研究の対象が広がっていったことも，国際比較研究への志向の強さも，多様な研究アプローチが存在したことの産物であったといえよう。

第四に，研究対象の選択にもある程度の特徴がみられるように思う。この時期に比較的多くみられた研究テーマの傾向をみてみると，まず，大学紛争期に問題とされたトピック，たとえば大学自治・学問の自由，講座制といった管理運営体制の問題などの歴史的背景の探求を試みたものが目につく。すでに指摘したような，大学紛争が歴史的問題への関心をかきたてる契機となっていたことは，研究テーマの設定にも現われていたといえる。加えて，高等教育の大衆化過程にかかわる諸問題を扱ったものが多いことも特徴である。これも先述のように，「エリート」から「マス」への段

階の移行という現実が，この時期の多くの高等教育研究者の関心を，大衆化の歴史的過程に対して向けていったのである。そして，研究の対象とされた時代は，明治の初期の近代的高等教育制度の成立期についてのものが，比較的に多いという特徴も指摘できよう。換言すれば，わが国の高等教育制度のルーツ探し，モデル探しに研究者の関心が集まったのである。このことについて若干述べておけば，通説としては，わが国の高等教育制度，特に帝国大学制度はドイツの制度をモデルとしてきたとされていたが，それに対する反論が出されていった。例えば，中山（1978）によれば，帝国大学制度には，ドイツの大学制度の特徴である「教授の自由」も「修学の自由」も，諸大学間の競争メカニズムも導入されなかった。また，天野（1974，1978）は，わが国の私立高等教育機関，特に私立専門学校ではアメリカ型モデルの特質が持たれていたことを指摘している。要するにわが国の制度は，どこか一国の制度を移入したわけでは決してなく，いくつかの国の制度の選択的な摂取の結果として形成されたことが明らかにされたのである。

3．1980年代 －専門化の進展－

以上のように1970年代には，高等教育史研究がひとつの研究領域として認知され始めたのであり，いわばこの時期は高等教育史研究の発生期であった。そして上述のような，1960年代，70年代の高等教育史研究の特徴のかなりの部分は，この時期以降においても維持されていくのであり，この時期はわが国の高等教育史研究の性格の形成に重要な意味をもった。これに対して，それに続く80年代は，この領域の専門化が進んだ時期であったといえる。70年代の－たとえば大学史研究会への参加メンバーに端的に現われていたような－，様々な専門分野の出身者による，ある意味で専門化していないアマチュアリズムともいうべきものは，専門家としての高等教育史研究者がある程度の人数に達し，かつ彼らが研究の主流に立つようになることによって，薄らいでいくことになる。かつての，専門化が進んでいなかっただけに，雑多で奔放なアイディアが生まれ，それゆえに熱気やエネルギーに満ちていた状態から，地味で静かな状況へと変化する。そこでは「手堅い」研究が中心となり，アマチュア＝非専門家たちからみれば，「面白くない」研究が増えてくる。したがって，他領域の研究者たちが，高等教育史研究から離れていくといった事態も生じてくることになった。

こうした専門化の傾向は，たとえば，70年代の末に，大学史研究会の機関誌の変化－『大学史研究通信』から『大学史研究』へ－に象徴的に現われている。すなわち，前者が，先述のように次第に研究雑誌化しつつはあったとはいえ，メンバーが各自の問題意識を語る欄（「大学史セミナーと私」）や合宿セミナーの記録にかなりのページがさかれ，いわば未完成のアイディアを出し合い，その交換の場としての性格を強くもっていたのに対し，後者は完成した論文の集成であり，純然たるアカデミック・ジャーナルの体裁をもつようになっていった。

おそらく，そうした専門化と，それに伴う学際性のある程度の希薄化と，そして根本的には，大学紛争期の熱気の余韻が完全に消え去ってしまったことによって，70年代にみられたような高等教育史研究のボルテージの高さを，この80年代に見いだすことは難しくなる。このことは70年代に研究の中核的存在であった大学史研究会が，80年代に「苦闘」の時代（舘，1989）を迎えていたことに端的に現われている。また，1978年末に「第１次大学史研」が解散し，若いメンバーによって

「第2次大学史研」が新たに発足したことも，そうした高等教育史研究全般の傾向をある意味で反映していたのかもしれない。いずれにせよ，この時期には，かつて大学史研究会が果たしていたような，高等教育史研究における中核的存在がなくなっていたことは確かであろう。

しかし，そのことは，高等教育史研究全般の沈滞を意味するわけでは決してなく，この80年代においても，少なからぬ研究成果が生み出されている。教育史家のものとしては，三好（1982，1985）は，70年代に発表した工業教育の研究に引き続いて，幕末から明治初年にかけての農業教育や商業教育の成立の過程を描いたものである。筧田（1982）も，前著の続編として，大正期以降の高等学校制度の展開について分析している。また，村田（1980）は，女子高等教育の発展過程を，特に女性による大学教育獲得運動を中心として考察したものであり，佐々木（1984）では，高等教育機関の入学試験制度の歴史に詳しくふれられている。

教育社会学者のものでは，藤原（1981）は，産業化・都市化の進展のなかでの，官立高等教育機関の地域配置政策の変遷を分析し，その地方分散化がすすむ経過を明らかにしている。また，天野（1982，1983，1986b）は，わが国における学歴社会の成立と，高等教育の社会的選抜機能とのかかわりを歴史的に考察したものである。さらに潮木（1984）は，明治中期に京都帝大法科大学がドイツ型の教育システムの導入をはかり，東京帝大に挑戦しつつも挫折した過程を明らかにし，また同じく潮木（1986）は，大学内での学生文化・教員文化の葛藤・対立の諸相を，日本・アメリカ・ドイツなどの各国の国際比較によって描き出している。ローデン（1983）は，戦前期の高等学校学生のライフ・スタイルを明らかにすることにより，高等学校が果たしていた社会的機能を分析している。いまだ翻訳はされていないが，Kinmonth（1981）は，近代日本の青年層の社会史とも呼ぶべきものであり，高等教育の問題にもふれるところが多い。

加えて，上記の研究者たちよりも，一世代わかい研究者が高等教育史研究の第一線に登場してきたこともこの時期の特徴である。たとえば，70年代のものではあるが高等技術教育の成立期についての舘（1976），大学院史の古屋野（1978），大正期の制度改革に関する中野（1979），大学財政史研究の羽田（1983），大正期の高等教育拡張計画についての伊藤（1986）など，特に政策史・制度史の各領域での研究が進展していった。

また，この時期に関して忘れてはならないのは，各個別学校沿革史編纂の質的充実の傾向である（寺崎，1986b）。すでに60年代から，たとえば『東北大学五〇年史』（1960年）や『慶応義塾百年史』（1960－69年）などの質の高い大学史が登場し始めていたが，そうした傾向が広まってくるのが，70年代後半から80年代にかけての時期であった。すなわち，それまでの，記述の信頼性が低く，しばしば過去の自校の顕彰に終始する傾向が強かった学校史から脱却し，「学術書として読むに耐えるものを作る」（寺崎，1986b，p.17）という考えが普及した。そして，学校史編纂作業への教育史の専門家による参加・執筆が一般的となり，学校史自体が学術的文献としての体裁を整えるようになってきた。さらに，学校史編纂の際に，史料集・資料編が整備され，研究紀要が発行される場合も増えてきた。加えて，大学関係文書の保存のための文書館も，少数ながら，いくつかの大学に設けられるようになってきた。

そうした動きについて具体的にあげてみれば，すでに1967年より資料集を刊行している明治大学

のような先進的な例もみられるが，70年代末から80年代にかけて，明治学院大学，宮城教育大学，一橋大学，法政大学，立教大学，東京大学，北海道大学，上智大学，中央大学，立命館大学など多くの大学が，「資料集」や「資料室だより」を刊行するようになる。加えて，『早稲田大学史記要』（1965年創刊，以下同），『関西大学史紀要』（1975年），『東京大学史紀要』（1978年），『大阪大学史紀要』（1981年），『明治大学史紀要』（1981年），『東洋大学史紀要』（1983年），『名古屋大学史紀要』（1989年），『神戸大学史紀要』（1991年）などの刊行にもみられるように，多くの大学が大学史紀要の発行を行なうようになったのもこの時期であり，それらは各種資料の紹介の場であると同時に，高等教育史研究の発表の場ともなっている。

おそらく，このような傾向を代表するものとして，『東京大学百年史』（1984－87年）の編纂作業をあげておくべきだろう。この，通史3巻，部局史4巻，資料3巻の合計10巻におよぶ大部な大学史の発行にあたっては，その編集作業に多くの高等教育史の専門家が参加し，組織的な史料収集の努力がなされ，上にあげたような研究紀要も発行された。また，大学史の編纂を担当した部署は，編纂作業の修了後には「東京大学史史料室」となり，そこに編纂作業の過程で収集された史料が保存され，いわば大学アーカイブズとしての役割を果たしつつある。しかも，研究紀要が編纂作業終了後にも引き続いて刊行されていることは，他の大学史の編纂の場合にはみられない特徴である。

加えて，これまで入手が困難であった多くの高等教育関連の基礎史料の復刻がおこなわれるようになり，高等教育史研究にとっての環境整備が進んだことも，この時期の特徴といえる。たとえば『帝国大学新聞』をはじめとして，主要官立大・私立大の大学新聞が復刻されている。また，教育史研究全般に関わることであるが，いくつかの教育雑誌の復刻も進んだ。旧制高校学校については，資料集（旧制高等学校資料保存会，1985）も刊行された。以上のような，個別学校史の編纂状況や，高等教育史関係資料の整備状況をみれば，この時期が，高等教育史研究のいわば「インフラストラクチャー」の整備が進んだ時期であったともいうことができるかもしれない。

4　1980年代末から90年代　－再びの隆盛？－

1980年代の末から，高等教育史研究の状況は若干の変化をみせているように思われる。大学紛争時以来ともいわれる昨今の高等教育改革の機運の盛り上がり，さらにはそれに伴う高等教育研究ブームといったことに，おそらく連動しているのであろうが，歴史研究もわずかながら隆盛のきざしをみせつつあるようにも感じられる。少なくとも，学会発表数や論文数などの量的な面では，ここ数年間，高等教育史研究は増加の傾向にあるようである。こうした最近の動向については，現段階でその特徴を十分に描き出すことは困難だが，以下では，いくつかの目についた傾向を列挙してみよう。

まず，教育課程など高等教育の中味についての分析が，少数ではあるが登場してきている。既に挙げたが，京都帝大法科大学の教育改革についての潮木（1984）は，教育研究体制レベルでのドイツ大学の影響を明らかにしたものである。さらに関（1988）は，明治以来の一般教育と専門教育との歴史的位置づけを試みたものである。また，御雇教師ハウスクネヒトに関する寺崎・竹中・榑松（1991）もこうした研究の流れに関係しているといえるし，寺崎（1992）は，東京大学に対象を限ったものではあるが，「学年暦」，「成績と評価」といった，これまでの制度史が取り扱わなかったト

ピックにふれている。こうした研究があらわれつつあることは，高等教育研究全般においての，カリキュラムやティーチングなどに関する研究の重要性が認知されつつある状況を反映しているといえるかもしれない[3]。

もうひとつは，戦後大学史研究の展開である。すでにみたような，1970年前後の海後・寺崎（1969）や寺崎編（1970）以来，この分野の研究はあまり進んでいなかったが，最近になって新しいいくつかの研究が登場している。たとえば，戦後大学史研究会（1988）が，新制大学の発足期について，学校教育法，大学基準，私立学校法などの成立過程を考察しているし，黒羽（1992）は，1960年代以降の高等教育政策について，大学の管理運営，入試，政府の高等教育計画，私学政策などに関して，その推移を明らかにしている。さらに大崎編（1991）は，1960年代末の大学紛争に関して，当時の大学管理者，文部省当局者の証言・座談会記録を集めたものである。これまでの戦後史研究は，占領期までに対象を限る傾向があったが，最近はそれ以降の時期についても研究が登場しつつある。このような戦後高等教育史研究の盛り上がりの背景には，現在の高等教育改革が，いわば戦後体制の見直しを強く志向しているだけに，そうした研究に対する要請も増してきているという事情があるのだろう。

さらに，高等教育史研究への新しいアプローチも試みられている。若干の例をあげてみれば，片岡・山崎（1990）では，学校所蔵の『個人調書』を利用した学生層の分析や，同窓会名簿を利用した卒業生のキャリア・パターンについての精緻な分析を，パーソナル・コンピューターを利用した「計量的歴史社会学」的手法によっておこなっている。天野（1992）は，近代日本における学歴主義の浸透過程を，特に明治期について，社会階層との関連，若者の進路選択，学閥問題などさまざまな側面から考察したものである。さらに竹内（1991）は，明治以来の「受験的生活世界」の変遷を描いた，受験生の「心性」史ともいうべきユニークな研究である。このように，特に教育社会学者によって斬新な観点からの研究がいくつかみられるようになっている。

その他に，異色なところでは，建築史の観点からわが国の高等教育機関のキャンパスの歴史を分析した宮本（1989）がある。また，高等教育に関係した人物の伝記類も，次第に充実しつつあるように思える。たとえば，いくつか目についたものを挙げてみても，穂積陳重についての穂積（1988），一戸直蔵についての中山（1989），小倉金之助についての阿部（1992），などがあげられるだろう。また，Bartholomew（1989）は，明治期の科学研究体制について分析したものであり，当時の高等教育の研究体制についてもふれる部分が多い。

III．評価と展望

1．評価

1960年代に，ほとんどそれ以前の研究の蓄積をもたずに始まった，わが国の高等教育史研究は，90年代の今日に至るまでに，専門的研究者の集団が形成され，充実した通史やモノグラフや，そして最近は個別学校史を，もつようになり，ひとつの研究分野としての認知を得たといえる。そればかりか，より広く，わが国の高等教育研究全般のなかにおいても，歴史的研究はきわめて重要な役

割を果たしてきたように思える。このことは，高等教育研究のリーダー的人物がしばしば歴史分析に強い関心をもち，優れた歴史研究を行ない，彼らが同時に高等教育史研究の指導者的人物となっていることからも，うかがえるだろう。

しかしその現状は，以下のような諸点において，いまだ満足のいくものとはいえない。

まず，研究の空白部分が数多く残されていることである。対象とされる時期についていえば，以前のような明治前半期の帝国大学成立期に研究が集中した状態－ルーツ探し・モデル探し－からは多少改善しつつあるとはいえ，概して大正期以降については研究が手薄である。たとえば，両大戦間期は，わが国の高等教育の大衆化の最初の段階であり，かつ戦後に連続する多くの側面をもった時代であったにもかかわらず，そこに十分な検討が加えられていない。また，戦後期についても，先述のように，最近の関心の高まりに応えて，徐々に研究が出始めているとはいえ，これからの研究分野である。戦後体制の全体像を明らかにするためには，これまで比較的研究の集中してきた占領期のみならず，その後の時期までも対象として含んだ研究が求められることになろう。

さらに，制度・政策面での研究－それも決して十分であるとはいえないが－に比べて，高等教育の内側の事柄，すなわち，カリキュラム，ティーチング，研究体制，管理運営機構に関する研究は大きく遅れている。カリキュラムやティーチングに関しては，上にあげた少数の研究が存在するのみである。研究体制については，全国的な政策的動向についてはある程度は明らかにされているとはいえ，個々の機関のなかにおいての，あるいは個々の専門分野レベルの状況についてはほとんど研究の対象とされていない。また，管理運営については，これまで「大学自治」に関して，政府の高等教育機関に対する干渉という側面のみが強調されて論じられる傾向が強く，それ以外の側面についてはほとんど研究がない。アカデミック・プロフェッション研究として教員層に対する研究はある程度はみられるが，学生集団に関する研究は意外に進んでおらず，学生運動研究などの例外を除けば，信頼するに足る研究は少ない。

すでにみたように，個別学校史の編纂事業は質量ともに近年において相当に充実しつつある。けれども80年代半ばに「個別大学沿革史を生かすべき大学一般史がない」（寺崎，1986b，p.23）といわれた状況は，上にもみたように，大きく改善されたとはいえない。史料類が整備されたからといって，それがそのまま研究の質の向上に結びついているわけでは決してないのである。

研究者層の薄さも大きな問題である。高等教育史を専門とする研究者の数はいまだ限られており，このことが上述のような研究分野の偏りの問題のひとつの重要な背景である。専門家の数が増えることが無条件に善であるとはいえないが，研究の裾野を広げ，研究領域のかたよりをなくするためには，もっと多くの研究者が参入したほうがよい。特に20～30歳代の若い研究者の層が薄いことは，高等教育史研究全体の活力の発揮に大きな障害となっているように思われる。なお，1970年前後にこの分野の研究を開始した，いわばパイオニアの世代が研究をリードする構造は，この20年間にわたってあまりかわっていない。若い世代は，決して業績を上げていないわけではないが，前の世代の陰に隠れてしまっている印象が強い。研究者の層を厚くするというだけではなく，若い世代のより積極的な発言・イニシアティブが求められているのかもしれない。

さらに，高等教育関係資料の収集・保存体制の問題も重要な課題である。特にこのことは，個別

学校史編纂の場合に問題になることであり，多くの大学で，学内文書が処分・散逸の危険にさらされている。大学アーカイブズの整備が緊急の課題である。この問題は，研究者の個人的な努力だけではなく，大学による組織的な対応が必要な事柄であろう。

2．展望

すでに述べたように，ここ最近，高等教育史研究が，再び隆盛に向かうきざしがみえている。しかし，そのような傾向が，はたして，20年前と同様な，豊かな成果を生み出すことができるだろうか。

おそらく，そのひとつのポイントは，わが国の高等教育史研究が当初からもっていた学際性を維持できるかどうかということであろう。高等教育というそれ自体学際的な存在を対象とする以上，それは欠かせないことである。しかし，かつてと比べて専門分化が進展しているだけに，他分野からの刺激をどれだけ柔軟に受け入れることができるかが大きな課題となるだろう。

加えて，もうひとつのポイントは，今日的な問題意識に裏打ちされた歴史研究でありつづけることができるかどうかということであろう。歴史研究が，研究者の好奇心の赴くままの「好事家的」研究でよいのか，あるいは今日的問題への対処に何らかの形で寄与する「有用」な研究であるべきか，議論があるところだが，少なくとも，これまでわが国の高等教育史研究の最良の部分は，アクチュアルな問題状況から常に刺激を受け，かつその成果が，今日的問題を考える際の助けとなってきたのであり，その伝統は維持していくべきものだと思うからである。

＜注＞

(1) 筆者はすでに，教育社会学的なアプローチによる高等教育史研究の動向をまとめたことがあるが（有本・金子・伊藤，1989），本稿にそれと一部記述が重なる部分があることをお断りしておく。また，特に教育史分野での動向については，寺崎（1986a，1986b）に多くを負っていることを明記しておく。

(2) 個別学校史の動向については，寺崎（1973，1986a，1986b）を参照のこと。

(3) こうした高等教育機関の中身の問題への関心が高まっている傾向に関連するものとして，個別沿革史における「学問史」の最近の発展にもふれておくべきだろう。たとえば，『関西法律学校創立とその精神』（関西大学法学部，1986年），『京大史記』（京都大学創立90周年記念協力出版委員会，1988年），などにみられる「学問史」の展開は，従来の制度史偏重の沿革史の形態に大きな変化をもたらす可能性があるという指摘もある（寺崎昌男「報告要旨」，「書名略表」［大学史研究会シンポジウム「大学史研究の回顧と展望」レジュメ］1992年12月5日）。

＜参考・引用文献＞

麻生　誠，1970　『大学と人材養成』中央公論社。
麻生　誠，1978　『エリート形成と教育』福村出版。

麻生　誠，1982　『近代化と教育』（教育学大全集３），第一法規出版。
麻生　誠，1991　『日本の学歴エリート』玉川大学出版部。
天野郁夫，1974　「高等教育大衆化の過程と構造」『名古屋大学教育学部紀要－教育学科』第21巻。
天野郁夫，1977　『日本のアカデミック・プロフェッション』（大学研究ノート第30号），広島大学大学教育研究センター。
天野郁夫，1978　『旧制専門学校』日本経済新聞社。
天野郁夫，1982　『教育と選抜』（教育学大全集５），第一法規出版。
天野郁夫，1983　『試験の社会史』東京大学出版会。
天野郁夫，1986a　『高等教育の日本的構造』玉川大学出版部。
天野郁夫，1986b　『試験と学歴』リクルート出版部。
天野郁夫，1989a　『近代日本高等教育研究』玉川大学出版部。
天野郁夫，1989b　「大学研究の回顧と展望」『IDE-現代の高等教育』No.300，民主教育協会。
天野郁夫，1991　『学歴主義の社会史』有信堂。
天野郁夫，1992　『学歴の社会史』新潮社。
阿部博行，1992　『小倉金之助』法政大学出版局。
有本章・金子元久・伊藤彰浩，1989　「高等教育研究の動向」『教育社会学研究』第45集。
石附　実，1972　『近代日本の海外留学史』ミネルヴァ書房。
伊藤彰浩，1986　「大正期『高等教育機関拡張計画』をめぐる政治過程」『教育社会学研究』第41集。
伊藤彰浩・岩田弘三・中野実，1990　『近代日本高等教育における助手制度の研究』（高等教育研究叢書）広島大学・大学教育研究センター。
潮木守一，1973　『近代大学の形成と変容』東京大学出版会。
潮木守一，1984　『京都帝国大学の挑戦』名古屋大学出版会。
潮木守一，1986　『キャンパスの生態誌』中央公論社。
大久保利謙，1943　『日本の大学』創元社。
大﨑　仁編，1991　『「大学紛争」を語る』有信堂。
尾崎盛光，1967　『日本就職史』文芸春秋社。
海後宗臣・寺崎昌男，1969　『大学教育』＜戦後日本の教育改革９＞，東京大学出版会。
片岡徳雄・山崎博敏編，1990　『広島高師文理大の社会的軌跡』広島地域社会研究センター。
唐澤富太郎，1955　『学生の歴史』創文社。
旧制高等学校資料保存会，1985　『旧制高等学校全書』１～８巻，別巻，旧制高等学校資料保存会刊行部。
黒羽亮一，1992　「1960年代以降の大学政策－その体験的整理と検討」『大学研究』第10号，筑波大学大学研究センター。
国立教育研究所，1974　『日本近代教育百年史』全10巻，教育研究振興会。
古屋野素材，1978　「東京大学大学院に関する統計資料(1)」『東京大学史紀要』第１号。
坂本藤良，1977　『日本雇用史』上・下，中央経済社。

佐藤憲三，1964　『国立大学財政制度史考』第一法規出版。
佐々木享，1984　『大学入試制度』大月書店。
関　正夫，1988　『日本の大学教育改革－歴史・現状・展望』玉川大学出版部。
戦後大学史研究会（代表：大崎仁），1988　『戦後大学史－戦後の改革と新制大学の成立』第一法規出版。
高橋左門，1986　『旧制高等学校全史』時潮社。
竹内　洋，1988　『選抜社会－試験，昇進をめぐる＜加熱＞と＜冷却＞』リクルート出版。
竹内　洋，1991　『立志・苦学・出世』講談社。
舘　　昭，1976　「日本における高等技術教育の形成」『教育学研究』第43巻第1号。
舘　　昭，1980　「新『大学史研究会』と『大学史研究』の創刊」『IDE －現代の高等教育』No.212，民主教育協会。
舘　　昭，1989　「大学史研究の動向」『IDE －現代の高等教育』No.300，民主教育協会。
田中征男，1978　『大学拡張運動の歴史的研究』野間教育研究所。
寺崎昌男編，1970　『戦後の大学論』評論社。
寺崎昌男，1973　『大学・高等教育機関の沿革史（修訂版）』（教育史文献解題シリーズ②）野間教育研究所。
寺崎昌男，1979　『日本における大学自治制度の成立』評論社。
寺崎昌男，1986a　「大学史・高等教育史研究の課題と展望」『日本教育史研究』第5号。
寺崎昌男，1986b　「日本における大学史研究の動向と課題－大学沿革史編纂を中心として－」『東洋大学史紀要』4。
寺崎昌男・竹中暉雄・樽松かほる，1991　『御雇教師ハウスクネヒトの研究』東京大学出版会。
寺崎昌男，1989　「歴史研究，そしてそれだけ」（特集：私と「大学研究」）『IDE －現代の高等教育』No.300，民主教育協会。
寺崎昌男，1992　『プロムナード東京大学史』東京大学出版会。
寺崎昌男・成田克矢編，1979　『大学の歴史』（学校の歴史第4巻），第一法規出版。
筧田知義，1975　『旧制高等学校教育の成立』ミネルヴァ書房。
筧田知義，1982　『旧制高等学校教育の展開』ミネルヴァ書房。
中野　実，1979　「大正期における大学令制定過程の研究」『立教大学教育学科研究年報』第22号。
中山　茂，1971　「展望：大学史－科学史の背景としての」『科学史研究』II，10
中山　茂，1974　『歴史としての学問』中央公論社。
中山　茂，1978　『帝国大学の誕生－国際比較の中での東大』中央公論社。
中山　茂，1989　『一戸直蔵』リブロポート。
永井道雄，1965　『日本の大学』中央公論社。
永井道雄，1969　『近代化と教育』東京大学出版会。
日本科学史学会編，1964－72　『日本科学技術史体系』25巻，第一法規出版。
羽田貴史，1983　「大正末期の帝国大学財政制度改革」『日本の教育史学』26集。

広重　徹，1973　『科学の社会史』中央公論社。
深谷昌志，1969　『学歴主義の系譜』黎明書房。
藤原良毅，1981　『近代日本高等教育機関地域配置政策史研究』明治図書。
穂積重行，1988　『明治一法学者の出発－穂積陳重をめぐって』岩波書店。
宮本雅明，1989　『日本の大学キャンパス成立史』九州大学出版会。
三好信浩，1979　『日本工業教育成立史の研究』風間書房。
三好信浩，1982　『日本農業教育成立史の研究』風間書房。
三好信浩，1985　『日本商業教育成立史の研究』風間書房。
村田鈴子，1980　『わが国のおける女子教育成立過程の研究』風間書房。
渡辺　実，1977－78　『近代日本海外留学生史』上下，講談社。
Bartholomew, J.R. 1989 *The Formation of Science in Japan*, New Heaven: Yale University Press.
Ben-David, J. 1966 "The Growth of the Professions and the Class System", in R. Bendix and S. Lipset ed., *Class, Status, and Power*, 2nd edition, The Free Press.
Ben-David, J.（新堀通也編訳）1969『科学と教育』福村出版。
Ben-David, J. 1971 *The Scientist's Role in Society*, Englewood Cliffs, N.J.: Prentice-Hall.［潮木守一・天野郁夫訳『科学の社会学』至誠堂，1974］。
Ben-David, J. 1977 *Centers of Learning*, McGraw－Hill.［天城勲訳『学問の府－原典としての英仏独米の大学』サイマル出版会，1982］
Kinmonth, E.H. 1981 *The Self-Made Man in Meiji Japanese Thought*, Berkeley: University of California Press.
Roden, D.T. 1980 *Schooldays in Imperial Japan*, Berkeley: University of California Press.［森敦監訳『友の憂いに吾は泣く－旧制高等学校物語』上・下，講談社，1983］
Smith, H.D. 1972 *Japan's First Student Radicals*, Cambridge: Harvard University Press.［松尾尊兊・森史子訳『新人会の研究－日本学生運動の源流』東京大学出版会，1978］
Spaulding, Jr. R.M. 1967 *Imperial Japan's Higher Civil Service Examinations*, Princeton: Princeton University Press.
Trow, M.（天野郁夫，喜多村和之訳）1976『高学歴社会の大学』東京大学出版会。

Recent Trends in Historical Studies of Japanese Higher Education

Akihiro ITOH *

This paper examines 'the state of the art' of studies on Japanese higher education history.

Studies in this field finally gained momentum after the 1960's. Befoer that period, there had been practically no full－fledged study except for a couple of outstanding works. However, the situation drastically changed after the 1960's. Due to the dramatic campus disputes in the period, concern toward higher education issues became stronger than ever, and consequently higher education history became one focus of the researchers' interests. Therefore, during the period from the 1960's to the late 1970's, there was a surge in enthusiasm for studies in higher education history.

Although this enthusiasm did not last long and seemed to fade by the beginning of the 1980's, the state of studies on higher education history was completely different from that of before the 1960's. As of the early years of the 1980's, not a few number of specialists in this area had emerged, and as a result, a rich variety of research works had been produced by them. In addition, since the late 1980's, there seems to have appeared another surge in research in higher education history, probably stimulated by the recent higher education reform movment.

In sum, the development of higher education history studies in past 30 years has been amazing. Howerer, the present state of the studies in this field is still not adequate.

One of the problems is that themes of existing studies are not well－balanced. For instance, there are extremely few historical studies on higher education curriculum and teaching, management or administration of instiutions, students' life－style, etc. In addition, most studies focus on the Meiji period, while research on the Taisho and the Showa periods has not been advanced.

* Research Associate, R.I.H.E., Hiroshima University